

大陸（北支）

北支那の独歩大隊

孤軍奮闘す

富山県 瀬川 兼 男

大正十（一九二二）年一月八日、富山県西砺波郡福光町新町で、農業と種苗の販売を業とする家に生まれました。学校を卒業して京都に出て商業の修業をしていました。昭和十六年、徴集兵として検査を受け第一乙種現役と言われましたが、昭和十七（一九四二）年四月十日、補充兵として東部第四十八部隊（元歩兵第三十五連隊）に入隊をしました。

所屬は第一機銃中隊で、第一期の教育中病気になる

医務室へ入れられました。そのため、同期の仲間は独立混成第一旅団（島兵团）へ転出し北支へ出発しましたが、私は内地に残され、長野県の松本の連隊へ転属し、その後、北支へ行き島兵团に転出しました。

北支、河北省の邯鄲に島兵团の司令部がありました。私の所屬の独立歩兵第七十四大隊（島第二九六四部隊）は、河北省北部の彰徳が警備地であり、分遣隊の私の中隊は水冶鎮に本部がありました。

島兵团というのは、佐々木部隊と熊本の重機関銃三個大隊で、昭和十四年七月に編成されたと聞いています。しかし、平成二年七月、竹腰隊戦友会資料による、竹腰隊戦歴には次のように記録されているので参考のため付記しておきます。

(一) 昭和十四年八月、北支山西省の第二次潞安作戦の後、河北省邯鄲において金沢第一〇九師団を基幹とし独立機関銃第四大隊(熊本)を合わせて、陸軍少将谷口吳郎、兵団長統率の下に独立混成第一旅団を編成。五個独立歩兵大隊を隷下としていた。

昭和十八年に転属した部隊はその一つ独立歩兵第七十四大隊であり、河南省彰徳県城内に大隊本部を設け、隷下四個中隊をもって京漢沿線鐵路の輸送確保並びに、河南省彰徳県臨漳県及び内黄県旺鎮の治安確保の大任に日夜を分かたず邁進したのである。

(二) 彰徳県は京漢沿線中屈指の大都市で、古い殷時代(約三〇〇〇年前)は小屯村とし、農産物、綿花の集散地として栄えた都市であった。常時日本の商社員、家族等約二〇〇〇人の居留民が居住し、居留民会、小学校、国防婦人会等があり活気の溢れた都市であった。

(三) 竹腰隊のルーツは、独立歩兵第七十四大隊の第三中隊(当時、多胡中隊長)は旅団予備隊として邯鄲にあったが、その後間もなく、大隊の西方林県に蟠

踞する敵中央系第四〇軍数方に対して西方第一線たる水冶鎮に配備されていた……。

昭和十八年八月九日、大隊は隷下部隊と共に、永年県へ移駐することとなり、部隊本部は彰徳から臨潞閣へ、我が中隊は、長年住み慣れた水冶鎮の住民達と別れを告げ、数十キロ北東の、河北省永年県に移動することとなった。

永年県城は京漢線邯鄲から東北約二〇キロの大平野の中にあり、県内には敵(土着の旧土匪)約一〇〇〇人が蟠踞しており、常に我が軍に対し挑戦的であったが、これを討伐すると、どこかへ遁走し地下に潜入するという悪質な匪賊であった。

交代と同時に前警備隊の分散していた三つのトーチカを申し受け、警備態勢を整え万全を期した。我が隊は県内討伐肅正と治安確保のため主力をもって行動を常々実施していたが、有力な我が軍に対しては、いつも姿を現わさず避けているようであった。十二月末に、分哨連絡のため行動した我が方騎馬隊に、兵力少

敵と見た敵は村の中から襲いかかり、我が方に犠牲者を出したことは残念である。敵の戦法は、少数と見れば襲い、強力と見れば逃げるというものだ。

昭和十八年秋頃から、戦局は緊迫の度を加え、兵団も警備地区の拡張をしなければならず、また、他兵団の移動により兵力を抽出しなければならなくなった。特に、河南作戦が実施され、作戦部隊の留守警備もしなければならなくなった。

日本軍についている保安隊に対し、八路军が攻撃してくれば黙っているわけにいかず救援に行ったが、八路军は逃げてしまっていた。そのため、ある部落へ野営し一日休養したが、体が冷たくなり、体がだるくなって仕方がない。

昭和十九年二月二十五日、独立歩兵第二旅団、独立歩兵第一九六大隊、曙第一四五部隊という新設部隊に転属となった。そのため石門に集結。大隊長は中野寿一陸軍中佐で、大隊本部は、河北省井徑の有名な井徑炭鉱の中にあつた。

我が隊は第三中隊として炭鉱北方数キロの敵性の一寒村賈荘に中隊本部を置き、北方の山間部の数箇所に第一戦トーチカに分散配備の態勢を整え、炭鉱防衛の重大任務につき、これを完遂した。

我が独立歩兵第二旅団は、各独立歩兵大隊とも隸下四個中隊中、中隊長以下完全中隊として転属して来たものは、我が竹腰中隊一個中隊のみで、他の三個中隊はそれぞれ寄せ集めた將兵により新規に編成された中隊ばかりである。これがため、我が中隊は、その即戦力が重宝がられ、一番困難な方面の配備に向けられた。

この方面の敵、冀西地区（河北省西部）の共産八路军は、従来の蔣介石の中央軍に比較し、士気、戦力共に旺盛で、昭和十八年頃から兵力を他方面にも転用、改編等もしたため、著しく戦力の低下（有力師団は、内地・南方へ逐次転用されつつあつた）を見た北支軍にとつては逐次負担が増大していったが、我が隊はますます士気を鼓舞し配備を固めていた。

我が隊は井徑炭鉱北東方面の八路军に対する第一線

を確保のため、日夜討伐、肅正に東奔西走を繰り返していった。

河南作戦中、我が隊は三階建ての敵本部を包囲した。私は指揮班で、擲弾筒を撃ち込んで戦闘が開始された。大隊でも無理なのだが、我が竹腰中隊一個中隊で速戦し撤退さすのが目的であった。このことを、隊長は我々指揮班の部下にも話をされなかった。

山から下り、私の小隊は包囲しようとしたら敵がいて「誰何」された。敵の隊長は、それまで黙って我々を見ていたらしい。そこへ擲弾筒を撃ち込み、一個分隊が突入したが、その後、敵は我々を包囲して来た。

敵は、チャルメラのようなラッパを吹いて攻めて来て、我が軍と敵とは乱戦になった。私は最後には中隊長と一緒に戦った。私の後にいた兵隊は射撃して親指を負傷した。その時にはね返った石が胸に当たったのだ。補充兵の田中は、弾丸が口から胸へと貫通して戦死した。

宮下軍曹は、敵情を見ていて頭をやられた。兵隊が

「分隊長がやられた」と報告した。軍曹は鉄帽をかぶっておらず、額に手を当てていた。細野曹長・木村・渡辺、そして私もやられてしまった。

迫撃砲弾がヒュルヒュルと落ちてきた。しかも、その着弾点が段々と近くなり、これは危険だと思った時に、私は大腿部をやられた。気が付いたら血が出てズボン全部が真っ赤になった。私は「衛生兵」と呼び手当てをしてもらい、宮下軍曹もやられて血が出ているが戦死してしまった。

私は、このままでは全滅すると思ひ銃を取って撃つた。撃てる力のある者は皆撃つた。後に、「度胸があったなあ」と言われたが、やはり、このままままでは死んでしまうから敵を撃っていた、生きて帰ればならぬと思った。

その時、十三人の死体を置いて撤退するより仕方なかった。

点呼をとったら、重機関銃は持って来た、擲弾筒も、銃も持って来たが、死体は収容出来なかった。山を下りる時、敵は追尾して撃つて来る。私は足をやら

れているから戦友の肩を借りて下りた。友軍は大隊砲で援護して引き揚げて行った。

下の部落で、担架を作って中国人に担いでもらっていたが、敵が撃ってきたら、私の担架を放り出されてしまった。そのため、左足だけでビョンビョンと歩いてきた。

中隊の駐屯地まで二日間かかった。そこへ、大隊本部から応援が来て、私は一番負傷として先頭のトラックに乗せてもらった。一台のトラックには七、八人乗せられた。

昼間は、米軍のP51の戦闘機が来るので、対空監視は軽傷者がやってくれた。その日、トラックに乗せられた負傷者は鄭州の病院などに入院をさせられた。

鄭州では、空襲のたびに毛布を持って避難していた。そのうち、中隊で傷の手当てをすると願って中隊へ復帰した。一度手術をしたが、麻酔薬無しで「我慢しろ」と言う。手術台に乗せられて痛かった。軍医には「まだ手術してないぞ」と怒られた。

その後、出血多量で、大腿部の傷あとは噴火口よう

になっていた。しかし、破傷風の予防注射はしてもらった。足の骨は痛かったが、二カ月入院し、退院させてもらい原隊へ復帰した。

その後、中隊本部へ勤務中、岡田少尉の分遣隊が敵襲を受けたので救援に行き、竹腰中隊長は警備隊望楼上で戦闘指揮中、左肩から背中に貫通銃創を受けたので、その後、鄭州・済南の陸軍病院に後送された。

情勢は段々と悪くなり、ある分遣隊は全滅し、兵器は皆、井戸の中へ投げ入れてあったりした。私が以前警備していた水治鎮は、昭和二十年八月十日頃の終戦前に、一個小隊で二人を残しただけで玉砕してしまつた。敵は八路軍であり、敵はその時、日本軍は負けた（ポツダム宣言受諾など）という情報を知っていたのでしよう。

その後、岡村支那派遣軍司令官から、「最後まで戦う……」との訓示があつた。我々北支軍は、蒋介石軍を守るべく、昭和二十一年二月の帰還まで、銃・砲を持っていた。戦後、蒋介石軍と八路軍は戦争を始めて

いたので、我々が復員準備が出来たのは、新郷收容所に入ってからだ。

復員は上海からだだが、昭和二十一年四月十日、佐世保に上陸し、しばらくしてから復員だった。

北支竹腰隊の一員として

富山県 本郷 金一

私は大正十(一九二二)年六月十四日、富山市で売薬配置を業とする家の長男として生まれました。ご承知と思うが、富山の売薬は日本全国に広がる重要な産業でした。弟は大正十二年生まれで、海軍を志願しソロモン海戦で戦死しました。父は売薬配置の仕事をしていて全国を巡り、母は早死にしたので、長男である私が留守を守らなければなりません。若年であり商店に勤めておりました。小学校二年生の妹がいましたので、母の実家の祖母が留守を守ってくれていたのです。

昭和十六(一九四一)年徴集兵である私は、兵隊検査で第一乙種合格、現役となり、翌昭和十七年四月十日、富山の歩兵第六十九連隊に入営となりました。幼い妹と留守宅は祖母に頼んでの入隊でした。私の簡単な軍歴は次の通りです。

昭和十七年四月十日、富山、歩兵第六十九連隊へ入営、一期検閲後、同年六月二十八日屯営出發。

同年七月一日、宇品港出帆。同月十日、北支那河南省彰徳、河北省井陘、同永年、河南省汜水等で作戦、討伐、警備に従事。

昭和二十年八月、河南省汜水にて終戦。

昭和二十一年四月十日、佐世保上陸、復員。

一期の検閲まで、入営から二カ月余という短期間の教育でした。ところが、検閲終了後、外泊がありましたので、私等はいよいよ戦地へ出發が早いなと感じておりました。我々同期の初年兵は、北支組が先で中支が次となり、我々は北支ですから早く出發したのでした。